

とが出来る。また前引慧超傳の興易といふ語も、唐代の文獻例へば敦煌出土の七曜曆日（羽田、ペリオ共編、敦煌遺書第一集寫真本所收）の如きに頻出する語で、この場合にも興はやはり商の意に用ゐられてあるものと見なければならぬ。余が家畜賣買文書を始め唐代の文獻に見える興胡といふ名稱は商胡と同義であると考へるのはかゝる理由に據るものに外ならぬ。

かく考へた上でなほ残される疑問は、然らば何故に興と商とを同義に用ゐたかといふ問題である。那波博士は曾て「商」の語原を究明して、周代に商の民が賣買の業に従事したことから起つたものであらうと論述せられた（歴史教育、第十三卷第十二號、支那の國民生活）。傾聴すべき説である。然し唐代に於てはいふまでもなく商は語原の如何に關せず、商業行爲に對して普通に用ゐられてゐた語であるから、これを顧慮して特に興字を用ゐたものは思はれない。或は興と商と音の相類するものがあるから兩者を混用したのであらうといふ解釋もつけられるかも知れないが、今の自分の考としては興はやはり興利の興であつて、利を生ずるといふ意味から商と同義に用ゐられたものと認めたい。

（池内博士還曆記念東洋史論叢、昭和十五年三月）